



第4分科会

第1分散会

I はじめに

最初に、討議の柱と討議課題を確認した。「人権確立をめざすまちづくりとして、～地域の教育力・子ども会活動・啓発活動・学習活動・識字運動・文化創造～」、部落問題をはじめとするさまざまな人権問題の解決をめざすまちづくりをどう進めていくかという柱と、①から⑦までの討議課題を読み上げ、確認した。

II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—②

同和問題をこれからも学び続けていきたい

(福岡県同教)

報告者は、部落に対する偏見の言葉を聞いたことが転機となり、同和問題をはじめさまざまな人権問題を学ぶ『教育がねらうもの講座』に通い出す。

その後、『学びをつなぐ講座』として再出発をし、講座参加者が結婚問題を乗り越え、感謝されることがあった。講座を中心にして、同和問題を学ぶことで、なかまをつくり、差別がなくなっていくという展望が見られた。

—主な質疑と意見—

熊本 T先生との出会いと影響から、学びを続けるエネルギーにどう変えていかれたのか。差別発言をした人に今ならどう伝えるのか。学校教育への関わりは、どうされているのか。

福岡 講座のなかみをもう少し詳しく聞きたい。募集の仕方や内容はどうなっているのか。

報告者 知人からT先生の講座に行きなさいと言われて出会った。内容は、部落問題や様々な人権問題を学んだ。わかるまでと思っていたら、だんだんと興味が出てきて、ずっと続けようと思えるようになった。

今なら、発言をした人に「あなたが本当に経験したことなのか」という問いかけをする。

識字学級の中で学校での様子を聞いて、それを講座の中で伝えている。

講座では、いろいろな人を呼んで、学習している。基本には、部落問題がある。年度初めに市政だよりで募集をする。

熊本 報告者の主体的な動きが展望に結びついていて感じた。結婚差別の現実の中で、「どうせ断

られるなら、最初に言っておこう」とあるが、Eさんの娘さん自身の思いはどうだったのか、どう今は思われているのか。

報告者 娘さんは、後で被差別部落のことを理解した。母親は、学習して良かったと言った。相手の男性は、誠実だった。「なんでわざわざ言おうと、黙っておけばわからんやろう」と言い、気持ちを聞こうと思ったということだった。

奈良 わざわざ、「ムラなんだ」と言わなければいけないと思わせてしまう、この世の中がおかしい。学校教育の中で、そんな世の中がまちがっているということを伝えていきたいと思う。

報告者 Eさんとは、自分は出身だと言わなくてもいい世の中になってほしいが、まだまだ無理だという話はした。家族にも子どもたちにも学んだことは伝えていて、お互いの気持ちで結婚してほしいという話はしている。

新潟 差別事件と出会って、全人同教の基調に学び、知識だけを学び続けていても、先がないことに気づいた。先があるとしたら、変容があるということではないか。この講座には、続きがあって、学びから、それをどう感じているかを語り合うことができるのではないか。

今、高校の授業の中で、授業者が思いを語る授業を提起している。T先生の「わかるまで長く続けなさい」という言葉が響いた。

父の差別発言にケンカになった。今なら、違う言い方で父と話をしただろう。変わっていくことが大事であり、変わっていくというそのものが世の中を変えていくと思う。

熊本 「どうせ断られるなら、言っておこう」と言わせてしまう社会の中で、「何でわざわざ言おうと…」と言われた方の優しさを感じる。

熊本 講座の組織、内容、場所、費用等はどんなになっているのか。参加者は、どんな人たちか。

大阪 「どうせ断られるなら、…」という言葉に今の世の中の課題が詰まっている。結婚をしづるのは、正しい出会い、学びをしてこなかったからではないか。教員としての課題だ。地域活動に学校が参加できるような参考事例や、教育に期待するものがあれば教えてほしい。

報告者 代表、副代表が2名いる。筑紫野市が人権を守る大切な施策として推進しているので、会場費等の費用は免除されている。講座は10時から12時で、若い人は働いていて参加が無理である。年に1回は、地区懇談会があり、私たち講座の参加者は、みんなで参加して学習したことをその場で発言している。

福岡 高田さんは、一市民として「学びをつなぐ講座」を開いている。筑紫野市の「みんなで学ぶ同和問題事業講座」という事業指定をして、予算をつけてある。各行政区ごとに市民懇という形で同和問題を中心とする様々な人権問題に関する学習会を年に1回取り組んでいる。

報告者 教師が同和問題をきちんと学んで子ども

に伝えてほしい。そして、子どもが学校で学んだことを家に持ち帰って広げてほしい。講座の参加者を増やすためには、講座参加者が、参加を呼びかけることをしている。

—報告2—③

人権啓発推進委員とともに進める人権研修事業 (香川県同教)

東かがわ市では、人権啓発推進協議会が組織され、人権啓発推進委員が中心となった部落差別をなくしていく取組の報告である。

人権啓発推進委員も、人権推進課と研修のもと、「少人数・参加型研修会」を導入し、推進する中で3つの課題が見えてきた。さらに、「しあわせづくり研修会事業」の広がりや他市町や人権活動グループとの交流、推進委員に若い世代をつないでいくなかまづくりの視点があつた。

—主な質疑と意見—

熊本 人権啓発推進委員は、有給なのか。委員の選任の方法はどうなっているのか。推進委員が研修をする内容、課題意識、テーマなど、また、いつどこで開催されているのか。

報告者 人権啓発推進委員は、条例により定められている。市では、特別職の非常勤として、2時間を超える場合は8000円、それ以下の場合は4000円の報酬である。任命の条件は、人権同和教育・啓発の推進に関して学識経験、熱意を有するものとしている。熱意を持った方であれば、どんな仕事をしていても委員になっていただく。

人権啓発委員の学びとしては、自治体合併の経緯や問題などを学ぶ、部落史学習、因習・風習・迷信・けがれとか、思い込みとかにつながる意識、SNS上の課題などを学んできた。

推進委員が行う研修は、幼・保・教職員への研修、市の職員への研修、新転任者研修、高校教職員との座談会、高校生とへの座談会、指定校事業(授業実践)など、少人数・参加型研修(グループワーク)として行う。

推進委員として研修を進めるにあたって、その基盤は、部落問題学習である。推進委員みんなが同じ思いでスタートするために、市の部落問題を含む周辺地域の部落史学習を研究者に話をしてもらった。部落のある地域と混住の地域、部落のない地域で3町合併している。合併の中心になって動いたのが人権啓発推進委員の先輩たちである。その先輩たちに思いを語ってもらい、一緒に学び、同じ思いで市職員の研修を進めた。会計年度の隣保館職員と人権推進課職員がファシリテーターになって、少人数・参加型の研修に推進委員が入り共に学ぶ。

推進委員は、「しあわせづくり研修会事業」の講師陣を担い、老人会、自治会、子ども会に出向いている。人権啓発のための研修を自分の職場でもらう、自分の住んでいる地域の中でも研修を通して一緒に学んでいる。

高知 若年層とのズレがある。保・幼・小中高の教職員の研修会は、年に何回なのか。テキストはいただけるのか。参考にしたいので。

和歌山 出身教師との出会いで心が解放されて、自己開示も含めて、変容したとあつたが、もっとくわしく教えてほしい。「部落差別のない土地」という認識は、いかがなものか。

兵庫 人権推進課と市民の方と両方から報告を聞いて、よかった。当事者の立場で人権教育指導員をしているが、当事者でない方の加差別体験を話され、すごく訴える力があると感じた。そういう人たちがたくさん出てきてほしい。部落と隣の地域との合併というのが、想像がつかない。合併する時、反対とかなかったのか。

熊本 親や親戚からの結婚差別という話があつたが、話すことで解放されていく自分を語れるようになった変わり目のきっかけは何か。親や親戚には、話されたのか、その結果、変わったのか。

自分ごととして捉えるために具体的にどうすればいいのか。原点に戻るとあるが、原点とはどういうことなのか。

報告者 保・幼の職員は、3年に1回を何回も繰り返す。小・中・高の教職員は、年に1回である。テキストについては、連絡先を教えてもらえれば、送ってもいいと思う。

報告者 隣保館に赴任して、自分が差別者だったことを言えなかった。県外の出身教師が隣保館に来るたびに、町の教職員と一緒に、部落問題について、出身教師として何で教師になったのか、地域での親の思いとか願い、子どもにどういうことを伝えていきたいのか、自分たちだからこそ伝えられるというような赤裸々な話を何回も聞いた。毎年、隣の県の出身教師の家族会が町の温泉であり、親さんと話し、思いを聞くうちに、自分自身も差別者であると共に被差別体験者でもあると気づいた。

「みんな部落問題があることによって、つらい思いをするのは一緒だ。出身だろうがなかろうが関係ない。部落差別を残すことで悲しむ人がいる。一緒だ、なかまだ。自分を卑下すること自体がおかしい、学んだことを伝えていくことが、あなたのこれからの役割じゃないか」と言ってくれた。それをきっかけに、自分が差別をしたからこそ伝えることができる、体験を伝えることにした。被差別の立場で伝えるのは、大変な思いがある。でも、私のような差別をしたものが伝えることが効果があると思う。同じような人が近くに思う。自分が差別をしているということをもっと伝えていきたい。

香川 北海道には、全国各地から入植者がいる。その中に部落の人々もいるだろう。その中で部落差別があるかどうか、私にはわからなかった。それ以上にアイヌ民族に対する差別が酷かった。その差別が大きかったから、その影に隠れていたかもしれない。

香川に来て、子どもが保育園に入り、保護者向けの人権啓発研修があつても、残る人が少ない。「残

らないの?」「どうせ同和だろ」という会話があって、その一言が心に突き刺さった。どういことなんでしょうかと思ひ、毎年保護者研修を受け続けた。数年後、部落差別は人の命を奪うということがわかって、憤りを感じた。アイヌ民族差別と似ているところがある。出自を隠すために大都会に出ていく。しかし、そこでも、いつ出自がわかるかとビクビクして過ごしている。自分の生まれ育った土地に差別があるということを知り、20歳過ぎまで知らないまま、そういう生き方をしてきていた。香川に来て、アイヌの人たちと同じように結婚差別や就職差別があることを知って、ここで生活していくなら、その土地での差別を知らなければ、絶対に過ちを犯してしまうと思ひ、学びを積み重ねて人権啓発推進委員になった。確かに、北海道に部落差別はないとは言えないと思ひ。

報告者 私自身が親からの結婚差別を受けて、その後、隣保館で部落問題学習を受けた後に、親には実家に帰るたびに部落問題について話をした。兄の結婚の時も、部落問題について正しく考えてほしいと、自分の学んだことやしていることを伝えた。残念ながら、親戚にはできていない。義父母には、夫と共にしっかりと話をすることができている。

自治体合併は、スナリとはいかなかった。子ども会の合併が一番難航した。

香川 隣保館に勤めている。自治体合併は簡単にはできないが、ある行政職員が合併は必要であると考えて行った。ただ、行政主導ではよくないと考え、地区外の自治会長にお願いして合併を進めた。約3年かかっている。大切なのは対等合併だったということ。合併して40数年経つが、当初は差別があった。今では、隣保館に地域外の人がたくさん来る。やればできる。

報告者 自分ごととしてに関しては、教職員向けなら、「自分の教え子から『結婚しようと思ひ。相手が部落の出身、どうしたらいいか』と質問されたら、どうしますか」行政職員においては、「自分が結婚しようと思ひた時に相手が部落出身の人だったら、どうしますか」または、「他の人からそんな問ひ合わせがあったら、どうしますか」「差別動画を見た人が『自分の地域が映っていたけど』という相談があったら、どうしますか」という題を出して、自分ごととして考えてもらっている。

原点に戻ってということでは、「一丸となり部落差別をなくす」という最初の団結した想ひに立ち返ってということをやっている。

1日目総括討論

熊本 2本の報告とも、人権確立をめざすまちづくりのテーマに向けての確かなものがある。行政や学校教育行政として様々な推進課題に対して推進していくために、もっとこんな法や条例等があればということはないのか。

滋賀 Tさんの報告に関して、自分が大切にしてい

るルーツについて打ち明けた時に、なぜ試されなければいけないのか。「なぜわざわざ言うのか」というのに優しさもあるかもしれないが、マイクロアグレッションにつながることはないのか。自覚がない言葉で、その人を追い込んでしまっていることはないのか。

Tさんの思ひ差別のない明るい社会を教えてほしい。逆に差別がある社会を認識して、それをどう解消していくのかという考え方にスライドしていくという見方も大事だと思ひ。

私たちの住む部落から北海道にたくさん行っている。アイヌ民族に対する差別の中で部落差別が見えにくくなっているとあったが、もっと考えていく問題である。

部落差別の現場に出会ったことのない若年層という報告内容があるが、めっちゃ出会っていると思ひ。どう認識されているのか。

部落差別で傷ついた悔しさや怒りを自分ごととして考えるということも出てきているが、被差別の側の人たちの存在をしんどさとかつらさとか、怒りとか傷つくということだけで括らないでほしい。そうではなくて、闘いで勝ち取ってきた経緯、制度とか、同時にクローズアップしていく捉え方も必要だと思ひ。自分ごとというのは、差別を受けた人の苦しみをわかろうということもあるかもしれないが、差別をしてしまう自分をなんとかしようということ自分を自分ごととして捉えることが、受け止めやすいと思ひ。

実践報告協力者の皆さんが、会場で指名する時に、「そのこの男の人」とか、「女の人」とか言われているが、この会にも、もしかしたらLGBTQの人もいるかもしれない。それで、意見を言いたくても、やめようとなるのであれば、ものすごくもったいないと思ひ。

滋賀 活動されている皆さんのエネルギー、活動するモチベーションを聞きたい。私は、子どもたちのため、自分を問うために立っている。そして、関わっている子どもたち、これから関わる子どもたちに返していきたい。

依頼されて人権研修をすることがあるが、教職員の人権問題への温度差が激しい。「寝た子を起こすな」論的な考えの人はどう説明したら、向きあってもらえるのかずっと考えている。守りたいし、自分が傷つけないし、傷つけられたくない。だから、勉強せななという思ひを持ち続けることが大事だ。啓発を進める上で、人が集まらなかったり、感想が薄っぺらかったりと思ひ悩んでいたが、変わるのに時間がかかっても、変わるまで、あせらない、あきらめない、あなどらないで、なかまと思ひをシェアできるならば、頑張り続ける意味があると思ひ。

福岡 Tさんと同じ識字学級で学んでいる。その地域の学校に勤めることがきっかけで参加するようになった。残念ながら、学校がかわったり、担当がかわると来なくなる人もいる。しかし、Tさんは自ら求めて識字学級に参加している。わからないとこ

ろは、率直に尋ねられる。市民として人権問題、特に部落問題を自分の問題として捉えて、学んだことを家庭でも地域でも周りに伝えている。自分としては、周りにどう伝えていこうかが難しい。

熊本 私も差別発言を受けて、怒りを覚えた。どうやって伝えたらいいかと考えて伝えたが、ずっと話を聞いてくれた。その人の差別発言は、教育を受けていないからだなと思った。

11月に香川県高松市で水俣病を伝えるということで行ってきた。学校の中に入っていったら、子どもたちが真剣に話を聞いてくれて、感想を書いた。そこでは、行政、学校とつながっていると感じた。なぜなのかが、今日の話聞いて、つながった。

香川 中学校から教育委員会に異動して、担当として社会啓発の難しさを感じている。報告を聞いて、よかった。部落差別に出会ったことがない若年層の増加が、本当に出会っていないのか、気づいていないのか。あるいは、出会っていても、声が出せないのか。学校で様々な人権課題を勉強して、家族に伝える中で、そのことを家族に話すと4割ぐらいの子が反対され、マイナスの情報を植え付けられて、苦しかった、本当にしんどかったという声がある。どうやったら、気持ちを変えてもらえるか考えて、もう1回頑張ろうと重ねていく。その中で、「学校でこういう勉強をするから差別が続く、学校はいいことばかり教えているが、本当の現実はどうだ」と言われる。子どもたちは、学べば学ぶほどちゃんと勉強しよう、行動していこうとする。一番難しいのがおとな、地域の人である。

報告のような講座とか、熱いおとながたくさんいれば、うちの街も変わるだろう。人権フェスタという形で進めて15年になるが、おとなの参加が極端に少なくなる現状で、ぶれずにあきらめずに一歩ずつ進めている。たくましい若者たちがどんどん育ち、なかまとして語ってくれる若者が増えていく。

兵庫 当事者として、協議会の理事もして、部落問題を根底に据えて多くの人権課題をつなげてほしいと発言するが、なかなか伝わらない。

この2つの報告は行政の立場からすごい。マジョリティー側の人たちが立ち上がって啓発されていこうとしていて、理想だ。結婚問題でも、正しい教育がされたからこそ結婚ができたと思う。正しい教育を正しく受けて、正しく受け取れるという取組が現れていた。学校教育で、先生たちが部落差別をなくしていくという強い思いを持ってやってほしい。

香川の報告の中に合併のことが出てくるが、混住の地域に住んでいて、あとから入ってきた人たちは私たちは違うと言う状況がある。差別をなくするために合併されたのか聞きたい。みなし差別の問題はないのか。

滋賀 昨年度、地域の高校生集会をしたが、部落差別の問題だけではなく、いろいろな問題について

真剣に向き合っている。自分の経験も含めて、自分の言葉でしっかりとこうしたいと話してくれる子がたくさんいた。その姿に共感したり、涙したり、一緒に変えていこうという姿もたくさんある。そんな若い力が育ってきているのも、これらにつながっていけると思う。その子たちも、現在もなお部落差別を受けている現実がある。高校で、大学でこんなことがあったということを赤裸々に話す。おとなが真剣に向き合わなければならない。結婚問題でも、そう言わせてしまう社会の問題だが、その社会をつくってきているのはここにいる私であり、みんなであるという、言い換えると自分が差別を支えてしまっているということを報告からも感じた。

日々の中で真剣に向き合っているかということを感じる時がある。でも、それを問い続けることが今の自分自身にできることである。

報告者 同じく混住地域で、なぜ合併しようとしたのかは、そこに差別があったから、差別をなくすために合併した。財産を持ち寄っての対等合併だったと聞いている。老人会、婦人会、青年部、最後に子ども会の順番に合併した。子どもたちのことを地域外の親が気にしていた。

差別意識がないことはないと思う。隣保館でいろんな啓発をしている。行政区が4班あるうちの1つが丸ごと被差別部落となっていたが、最近、隣同士で行政区になった。

—報告3—④

「みんな一緒に差別をなくす側になれるといいのにな」(滋賀県人教)

「部落解放長寺子どもを守り育てる会」における「部落解放長寺小6合宿」の取組の報告と、その中で育てている子どもたちの様子の報告。自らが同じ体験をして、今度は親世代として関わっていく姿がよく見えてくる。

—主な質疑と意見—

熊本 長寺以外の子どもたちは、希望したら参加できるのか。小6ということでやられているのか。

滋賀 47年前に始まった。まず地域の子どもたちに、地域の中で自分たちの言葉でちゃんと思いを伝えることを大事にしている。「まつぼっくり会」という名称で昔からの自主活動で、1年から6年までカリキュラムを組んで、自分のムラを大切に思うという気持ちを育むためにセンターの担当職員を中心にやる。1年からの積み重ねの総まとめが解放合宿であり、中学に入学する前にきちんと伝えたいということである。

熊本 合宿で高校生の劇があるということだが、変わりきれない現実とはどういうものなのか、高校生や参加した子どもたちは、それをどう捉えているのか。<見抜く・許さない・負けない>ということを丁寧に子どもたちと考えていくとあるが、具体的にどうされているのか。

報告者 変わらない現実とは、高校生になるといろんな地域から集まるので、「あそこの地域は、サツと通らんとあかん」とか。我が子も高校生だが、そういうことを耳にする。小1の時からセンターの中で部落問題学習をしてきて、6年の合宿で長寺の素晴らしいところ、いいところの学びがあり、今の高校生の世代も「あっ、これが教えてくれていたことか」ということを感じている。伝えなくてもいいという人もいるが、学びがなければ、そこでの衝撃が大きいと思う。だから、学びって大事だと痛感している。

滋賀 小学校の教員として、報告者2人の子どもを担当していた。合宿の丁寧な指導というのは、学校でやっている普段の人権学習と一緒にある。地元の子どもは、地元でしっかり育てていくという思いで伝えていく。子どもたちは、それを受けて感じたことを一生懸命伝えてくる。その思いを汲み取って、おとながつかないでいこうとする。そういうコーディネートをしている。だから、丁寧な学習も、おとながするんじゃなくて、子どもたちが学んでくれるだけである。学校の先生のように勉強を教えるんじゃなくて、子どもたちが丁寧にしっかりと地元のおとなの思いを学ぼうという、学び方が上手な子どもたちの姿があるので、この学習が続いている。

和歌山 私のムラは、子ども会もあって、解放学習もあるが、部落の当事者としてというのが難しい。高校生になると、勉強をしながらグチを言っている。それを受け止める関係の大切さがわかる。社会的立場の自覚とか、親の仕事をきっちり見るとか、被差別体験を受けてとか、その小6の子どもたちが、自分たちのムラのことをどう思っているのか、部落差別についてどう思っているのか、出身者としての自覚とかについて聞きたい。

報告者 私の体験だが、6年生で聞いた時には衝撃だった。これからどうなるんだろうと怖かった。でも、この合宿の中で、人のつながりがあり、ここに長寺の人がたくさんいる、「何かあったら、相談するといいんやで」という言葉がすごく響いた。その人たちの顔を見ていたら、笑っていて、幸せに生きている、それなら大丈夫と思った。6年生だから、衝撃もあるけど、逆に柔軟性もあると思う。おとなたちは、こんなことをして大丈夫かと言うが、体験したからこそ言えるのは、「小6でやる、いいな」と毎回思う。やっていく中で、子どもたちの表情が変わっていくのを見るのは楽しい。しっかり感想を書けるとも思っている。

奈良 中学生友の会をし、校内で部落解放研究会をしている。その部落研の中で、30年ぐらい前から長崎の方、大阪の方と一緒に合宿が始まっている。今も続いているが、それを継続させていく中で、「そんな遠いところに行かなくても、できる」という意見が出る。悩んでいる中で、この報告で元気が出た。総会もされているが、その中に小・中の教職員は、全員参加しているのか。

滋賀 教職員の参加率としては、校区の保育園・

小・中の教職員全員入っている。私のこだわりで、合宿や総会に一切呼びかけたことはない。学校でも、人権学習やっていこうと一切言いたくない。大事にしたいから、やるということだけじゃないかと思う。学校の先生になると、人権学習や、道徳や、部落問題学習をしなくてはいけないと思う。最初は、同和地区があるから部落問題に取り組まなければならないとかんちがいをしてきた。地元の人たちが熱心に地元の熱を伝えてくれたら、子どもたちは部落問題に取り組みたいと思い、そこに教職員がのっかっていくだけである。学校で人権学習をしなければならないから、合宿をしなければならないから参加するんじゃなくて、差別をなくしたい、自分自身が差別をする側になりたくないという思いがあったら来てくれると思う。やっている姿を見て、興味を持って、どんどん人が集まってくる。昨年度は、ここ最近では最高の教職員の参加率だった。

新潟 新潟は、出身がわからない高校生が普通にいる。親も知らないこともある。その子たちとどう関わっていくかが課題である。部落なのかどうかに関心のない教員の問題が大きい。差別事件で糾弾される側になって、学校に出身の子が何人いるのかを把握するようになった。同和教育を進める中で、その子たちと部活動でつながっていった。地域歴史研究部を作って、人権同和教育に関する歴史を調べる。そこに出身の子どもたちを誘う。その子たちが、「ああ、出身なのか」と思った時に、近くにいることが大事だと思う。楽しくやろうと、部落の人が多く関わっている川舟教室をやった。部落のことを教えてはダメだけど、川舟のことを教えてにはOKが出る。やがて聞き取りもできるようになり、部落差別の話も聞けるようになり、それを生徒が聞けるようになっていった。

中学校から部落の子の引き継ぎがない。大事なことだと発言しているが、なかなか共通理解にならない。幼・保・小・中・高の連携の会もあるが、「今日もいい話が聞けました」で終わる。今日の話も持ち帰って、取り組みを投げかけたい。

新潟県にも、被差別部落の様子の動画を撮りに来ている。裁判をやるぞとなっているが、その家族の中で部落問題を語れない現実がある。その苦しみをわかった上で、日々取り組んでいる。

大阪 地域の中で子どもを見ていくことが厳しくなってきた中で、合宿が長年続いていることと地域活動で世代を越えたつながりがすごい。その中で、高校生が語る、劇にしている。どうしてもおとなが頑張っただけで子どもを見るという地域が多い。10代の子たちが地域に帰ってきて、小学生に受け継いでいる。それができる地域の力は、すごい。地域の愛情とか、次の世代に絶対これを伝えたいという思いがないとできない。以前の学校の子ども会で、合宿も遠足もあった。自分の子どもじゃなくても、本気になってその子を怒れるいい関係だなと思った。そこから、まちづくりってすごく魅力的

だと思い、こんなまちが増えていったらいいと思った。これからの社会は、地域がやってきた活動がモデルになっていくべきだ。そこから、自分の立ち位置が変わってきて、何でこのムラが差別を受けるのかと、理不尽さと共に怒りの感情が湧いてくる。

自分ごとという話があったが、当事者の苦しみや辛さとか想像はしても、わかるところまではいけない。差別をなくしたい、自分がなくさなくてはと思えることが当事者であり、解決の主体者になるかどうかだ。地域の方々との出会いの中で、部落問題は関係ないと思っていた自分に、なくしたいという感情が湧いてきた。他人ごとから自分ごとになったのは、地域の皆さんのぬくもりとか、地域で大事にしている人権を守るという姿勢、そこから自分は変わっていった。私も、最初、何の知識も経験もなかったのに、差別心があって、そこからのスタートだったが、ここに来て、自分ごとにしていきたい。

高知 児童館の指導員をしている。私は、地域で育て、子どもも高校生である。自分の子どもにはっきりと伝えているが、どうしても反応が薄く、自分には関係ないという感じだった。私も結婚差別を受け、子どもにも、その現実をちゃんと伝えている。伝わっているのかなと思ったら、中3の時の作文で「自分は、被差別部落出身」と書いた。その時、親として伝えていったことが伝わっていると思った。それが、地元だと1人、2人になる。今日、同世代の親がやっているのを聞いて、自分の自信にもなったし、帰って伝えていきたいと思え、うれしくて、この会に来て本当によかった。

兵庫 地域に解放子ども会がなくなってきている。長寺のようなことができていない。報告者が高校で体験したことを、ちょうど今我が子がした。小、中と部落民宣言をしてきていて、高校ではもういいだろうと思っていた。クラスの中で、小中と一緒に学んできた子から、「もうそんな差別なんか無い。そんな授業せんでも、英語とか数学とかをしたい」という声が聞こえて、先生に「自分のことを言いたい」と、みんなの前に立った。

大事だなと思うのは、部落差別をされる側も、他の人権課題については差別をする側にいる。我が子は保育士になったが、その時に自分の性について違和感があって、今トランス男性として過ごしている。親には最後に話した。親がどう捉えるかということがあった。何でもっと早く言ってくれなかったのかと思った。子どもから聞かされていろいろと勉強をした中で、「我が子の代わりはいない、あんたは、あんたや」と思えた。それは、解放運動をしてきたからだと思う。自分の中の差別性、性に対しての捉え方も見直しができる。子ども自身も、部落については堂々と言っても、性のことについてはなかなか言えなかった。

今は、元気に全国を飛び回っている。子どもたちにも、話に行く。その中で、「やっぱり解放教育をしている先生たちは、受け止め方が違う、スッと聞い

てくれる」と言う。やっぱり部落問題をきちんと学習して、何が問題なのかをわかっている人たちは、いろんな課題についても知ろうとするし、理解が早い。部落差別を知って、なくしていく営みをしていくことが、いろんな人権課題を解決していくことにもつながっていくと感じる。

滋賀 高校で長寺の子どもたちと出会って、強烈だった。ある子は、「自分は部落なんだけど、あんたどう思う」と初対面の子に言う。相手が、「何それ。そんな関係ない」と言うので、「じゃあ、もうあんたとは友だちにならん」という付き合い方で、なかまをつくっていく。逆に、長寺の子と共に学んできた地区外の子が、その地域に偏見を持っている子たちの「あそこは怖い」と言うのを聞いて、むちゃくちゃ腹を立てて休む。私から頼まれて家庭訪問した長寺の子に、その子は、「あんたら、何で怒ってないの。あんたら、部落やろ。私でも腹立つのに、腹立てんあんたらにもムカつく」と言う。そこで、長寺の子は、「ごめん」と謝る。次の日、その子は学校に来てくれたことがある。

その地域のよさは、その地域の中でつながっているということだと思う。小6合宿が位置付き、根付いているのは、誇れることだ。そんな子たちがどれくらいいて、今はどういうふうに生きているか、我々おとながつかんでいったら、おもしろいんじゃないかと思って話を聞いていた。

—報告4—①

『人権 N P O ちなもい』20年間のあゆみから

(熊本県人教)

2003年に設立した「人権 N P O ちなもい」は、6つの事業を中心に様々な活動を現在まで20年以上も展開してきている。それは、八代地域で制定された「人権教育推進に係る八代地域行動計画」の具現化のためである。

学んできた人権問題は多岐に渡り、現在では、ちなもい人権擁護・救済センターを設置し、人権相談・解決の取組を行なっている。

地域の中で、継続的に人権課題を学び、解消していくという取組には学ぶことが多かった。

—主な質疑と意見—

熊本 長年にわたっての八代地域での人権文化の人権のまちづくりだと思う。特徴的な人権啓発に関わる取り組みはどんなものがあるのか。四者一体の推進とあるが、最初の三位一体と関わっての特徴的な取り組みを紹介してほしい。

報告者 元々の起こりは、部落解放運動である。全国的にも厳しい闘いをして支部が認められた。1974年、八代市営屠畜場の浄化槽が壊れ、汚水が川に流れた。問題となり、市議会で取り上げられた。運動の中で、問題を解決するために同和対策事業があることを知った。支部を結成して、市に要望したが、なかなか市は動かなかった。部落解放同盟熊本県連とともに市と交渉し、市が地区はないとい

う公文書を国に出していることがわかった。地区認定に向けて、7名で始めたが、最後は1人になり、部落解放八代地区共闘会議を組織して、当時の全同教の西口委員長の訪問もあって、むしろ旗を上げながらの2年間の闘争の中でやっと地区が認められた。このことについては、現地研修会の中で、フィールドワークもしながら、詳しく紹介している。八代地域以外の現地研修会については、ちなもいとして受け入れている。

報告者 三位一体というのは、行政、教育現場、運動体である。それに、本当に広げていくためには地域の方の参加が必要だということで、地域住民を加えた四者一体というかたちが変わっていった。**奈良** 八代市に来る前にちなもい音頭のことをネットで調べてきて、ここで聴けて、とてもうれしい。地元の小、中学校の子どもたちも口ずさみ、体育祭でも振り付けがあって踊っているということを見て、小中学生に浸透しているということですよ。吉本さんは、小中学生にちなもい音頭についてお話をされているのか。

報告者 地元の小学校の3年生にちなもい音頭について説明に行く。子どもたちからの歌詞についての質問に答える。ちなもいというのは、八代の方言で、「ちなんで」とか「ちなむ」とかという言葉で、一緒にやろう、一緒に行動しようという意味であると答えたりしている。給食時間、昼休みにちなもい音頭が流れる学校もある。講演も一つの啓発方法だが、自然に耳から五感を通じて、音楽で子どもたちに理解してもらいたいと思い、ちなもい音頭を作った。中学校では、体育祭で踊ってもらったりしている。八代の人権子ども集会・フェスティバルでも、児童生徒実行委員会が中心になって歌って踊る。市民向けの人権セミナーの初め、前座として、作曲をした元教育長がアコーディオンを弾き、私が歌うこともしていた。歌で、八代をこんなまちにしようという啓発方法をしてきた。

熊本 三男は、重度の知的障害のあるダウン症の子どもである。昨年度、2つの県立高校から定員内不合格にあった。今、なかまたちと一緒に勉強できていない。そのうちの1校は、不合格を出した日に60名の追加募集を出した。定員が大きく割れていたにも関わらず、入学を許可しなかった。表面的には、障害者差別はダメだとみんな言われるだろう。制度的な問題もあると思うが、心理的な壁も多い。能力が十分じゃない人たちは、高校は義務教育じゃないし、学校は勉強するところで、一緒に学ぶのは難しいと考えられている。関係性の中で能力は発見され、育まれていくとを思っている。三男の定数内不合格を校長は、「能力適性が十分でない」と説明する。入口の時点で、あなたは能力がないからと言われることに違和感がある。

ちなもいに人権救済をしたのは、これは人権侵害で、差別であると確信しているからだ。高校は、準義務教育といってもいい状況である。障害があっても学びたいのであれば、支援学校しかありません

という違和感がある。行政にねじれがある、定員内不合格が望ましくないと言いながら、最終的には校長の判断であり、定員内不合格を完全には否定していない。社会にもねじれがある。共生社会をめざす、ダイバーシティ、インクルージョンと言いながら、実際に起きていることは逆行している。国連の条約を批准している日本であるにも関わらず、その条約から逆行するような教育の状態がある。分離教育や定員内不合格は、人権侵害ではないのか、差別ではないのか、考えてほしい。

熊本 ちなもいの人権擁護・救済センターの事務局として関係調整相談活動を行なっている。合理的配慮の一環として、とにかく学ぶ権利、なかまたちと共に生きていく権利を実現するために、保護者や本人、去年受験した学校、中学校、行政などと話を進め、息子さんの学ぶ場、共に生きる場を確保できるように動いている。

5年前にちなもいの活動の一つとして、人権擁護・救済センターの活動を始めた。相談内容は、多岐にわたり、熊本県内にも広げている。

教員になって同和教育を知り、部落の子どもたちや親との出会いがあった。高校生の学習会で、子どもたちの親を恨むとか、ここを出ていきたいという発言を聞いて非常に胸を痛めた。私も親を恨んでいたということに気づいた。56歳になって、初めて実の親に会い、親が涙を浮かべて受け入れてくれたことをきっかけに、56年間思ってきてくれていたんだとわかった。恨むということは、自分が生きづらくなる。ちなもいの活動の中に人権擁護・救済センターを位置付けて、相談者の生きづらさの改善に向けてやっている。

滋賀 全人同教の取り組みは、昔から点の取り組みを線へ、線を面の取り組みへと結集してきている。手法的なことじゃなく、まちづくりというテーマで、何を語るのか、何を伝えるのか、1人がどうしたら2人、4人になるのかという議論を是非ともしたい。自分の思っていることを伝える、自分ごとにする、どうすれば明日から向き合わなくてはいけない人と向き合えるのか、どうすればその人におもしろそうと思ってもらえるのか、学びたいと思ってもらえるのか、自分の差別性を語ってもらえるのか、そこを語っていかないと、本当の広まりはない。この差別社会にいれば、全員が当事者である。全員が当事者で、全員が自分ごとで、気づいていないだけで、どうすれば気づいてもらえるか、どう語ればいいのか、どうその人の思いを引き出せばいいのか、その人に気づいてもらえるのか、その議論をしたい。

2日目総括討論

報告者 我が子の小6の時の担任として、学校との連携した取り組みについて話してほしい。

滋賀 学校の教員だから、同和地区に来たから、小6の担任だから、部落問題をせないかと勝手に思っていた。地域の気持ちとか子どもたちの気持ち

ちとかじゃなくて、学校の先生としての正しいことをしたいと思っていた。

合宿をした後に、ふと「この子らは、合宿のことをどう思っているのか」と思った。合宿に参加した子どもたち一人ひとりに気持ちを聞いた。「クラスの地区外の子どもたちに知ってほしい」「先生、俺らだけが知っていても、なくならん。みんなに知ってほしい」と言う。一人だけ、「みんなに知られたら、みんな離れていくかもしれないから、嫌や」と言った。迷わず、「それなら、せなあかん。何で君が何もしてないのに、そんなことで悩まないといけないんだ。それが、部落問題だ。それをなくすために、クラスでしゃべろう」と言った。同時に保護者とも学校で部落問題学習をしようと思っていると話していた。そもそも、普段からどれだけ親とつながっているかだけだと思っている。

地域外の子に知ってほしいという子たちに聞くと、「部落とか部落じゃないとかじゃなく、友だちだ」と言う。そこで、ハツとした。地区とか地区外とかじゃなくて、あるのは子どもだ。子どもたちも、部落の子とか部落じゃない子とかじゃなくて、友だちを信頼している。ただそれだけを感じて、「今、実際に自分の住んでいるところで悩んでいる子がいる。みんなどう思う」と問うと、子どもたちから勝手に言葉が走っていく。部落の子と仲よしの子が、激怒して憤り、「何で、そんなことで差別されなあかんの」「何で、こんなに仲のいい友だちが住んでいるところを悪く言われなくちゃいけないの」「よく遊びに行くし、知らないおばちゃんが声をかけてくれるし、めっちゃあたたかいなと思っているのに、何で、そんなことを言われなあかんの。おかしい」と。

子どもたちがやりたいと言って、子どもたちが学ばせてくれて、自分らで学んでいってくれた。そこから、学ばせてもらった。

熊本 自分たちの取り組みを阻害する要因が場面場面で出てくる。阻害要因として、法や制度ができあがっていないことが大きいと思う。一市民として取り組みたい。

香川(報告者) 町単位の条例はあるが、話を聞いていて、香川でもSNS上の差別動画など大きな問題になってきて、削除依頼を市町から県へ、県から国へしたりしている。情報プラットホームへの同和問題の要望とか、差別事象の削除とかの大きなことも、一緒にしていくことも大事だ。市町の取組も大事だし、国として削除基準というようなものを明確にしてもらうということも大事である。

大阪 2校目で5年の担任である。今、自分のクラスには出身の子がいる。いる、いないで自分が変わっている。滋賀の報告を聞いて、タマリバルームでは自分が取り戻せたと聞き、それ以外では自分を見失っていたんだと思う。その原因が無関心だとしたら、自分もそうさせてしまう側の人間なんだと改めて反省した。

部落問題学習をする時に、地域の方と一緒にやっていきたいと思い、地区懇談会をこの前開いた。

「まだやってるの。そんなんするから、なくならん。もう差別ないで」と言う人がいた。素直な意見でうれしかった。その方の話では、職場で、自分の住んでいる地域を言えないと言っていた。本人は、それを差別だと捉えていないのかもしれないけど、それはすごく生きにくいことじゃないのかと思った。そんな話を本音で話し合えた経験の中で、本当に願っているのは、この子たちが、差別する子にも、差別される子にもなったらあかん、幸せに生きていかなあかん、おかしいことをおかしいと言える子にならんあかんという部分だけは共通している。その共通点をその方と共有できたことは、僕の中では大きい。悩んでいること、しんどいこと、今うれしいこと、楽しいことをしっかり聞いて、しっかりキヤッチして一緒に考えなあかんとか、そこがめっちゃくちゃ大事だと感じた。

福岡(報告者) 「なぜわざわざ言う」と、黙っておけば・・・という言葉に、結婚を申し入れた男性に二重の苦しみを与えているという指摘があった。それを差別だと捉えた方がいて、それに気づいていなかった。気づきを与えてもらい感謝している。自分は、部落出身ですがと言わなくてもいい社会になるといい。

差別のない明るい社会とはどんな社会で、どうしたいのかという質問があった。差別があると暗い気持ちになる。差別がなければ明るくなると思っている。差別はしない、させない、見過ごさないことが大事だと感じている。

原動力は何ですかという質問があったが、自分自身の無知から始まった同和問題の学習で、知らなかったことを知り、わからなかったことがわかると心が豊かになるし、楽しい。これからも、明るく楽しく学習していく。差別する側、される側ではなく、差別をなくす側になり、差別のない社会にしていきたい。

協力者 マイク担当の方がわかりやすいように、「グレーのジャケットの男性の方」「こちらの女性の方」と、無意識に使っていた。それに対して問題提起をいただいた。

保育園現場にいて、性別で色や服を決めつけるのはおかしいと言う自分でありながら、自然に「その男の人」とか「女の人」と口に出るということは、まだそのことをきちんと学習できていない、自分のものにできていないと思った。地元に戻る前に、ここにいるフロアの人たちと一緒にもう1回考えてみたい。地元で、そんなことがあったんだとみんなに発信して考えていけるようにしていきたい。今回の研修の中で、差別をなくす側として、一緒に学んで帰りたいという気持ちでやっている。今から、明日から、変われるように自分自身の気持ちと向き合っていきたい。会場の熱い思いを感じ、学びを次につなげたい。

協力者 思わず出る言葉ってたくさんある。身近なかまが指摘してくれる。そういうことを指摘してくれるなかまが宝だと思う。発言したことが悪いん

じゃなくて、スルーしてしまうことが悪いんじゃないか。

熊本 「わざわざ言わなくても…」は、確かに差別発言になる。結婚を受けいれているんだよというやさしさは少なからずあったのではないか。それを否定するのではなくて、いろいろ言われる中で気づいていなかった自分の言動を振り返って、改めていく。自分を語ること、いろんな人が語る事が大事だ。語ることで自分を知らせてもらう。聞くことによって相手を知る。そして、また語り合う。それを自分の生活と結びつけて、嫌だったことや嫌なことをしたことをお互いに言うことは、1, 2年生でもできた。だから、語り合うこと、相手を知ること、自分を知らせてもらうことが大事だ。

「部落差別のない土地」とあったが、部落差別があるがなかろうが、部落問題は考えなければならない。地区がなくても、ムラの子がいるかもしれない。出身の子がいると思ってやっていくことが大事だと思う。

合理的配慮、インクルーシブ教育の中で定数内不合格の問題が出された。法律は整備されているけれども、環境が整っていない。小学校では、障害児が交流学級の中で受け入れられている学校がある。高校でも、そんな人的な環境、物的な環境ができていけばいいと感じる。

大阪 小学校教員7年目。今年、被差別部落のある学校に転勤した。最近の悩みは、部落問題学習を進める中で、自分自身が部落の生まれでなく、これまで同和教育を受けてきた経験があまりないので、保護者に話を聞く時、自分の発言で嫌な思いをされていないか、こんなことを聞いていいのか、教える時に上からの見方になっていないかとかを気にしていた。この2日間で、そういう社会をつくっている当事者が自分だと感じた。自分自身が差別のある社会をつくっている当事者という意識を持って、学習をつくっていききたい。子どもたちに教えるという考え自体がちがうと聞いて、勉強だから、どうやって教えたら、伝えたらいいのかと思っていたが、子どもたちと一緒に学び、子どもたちが学びたいと思えるような努力をしていきたい。

熊本 今年7月にインターネット上の差別事件が起きた。町に3つの小学校があって、1つの中学校に行く。入学前の3つの小学校の6年生の合同学習会の中で、解放子ども会の子どもたちがステージに立って活動報告をする。地域の支部、運動体の方で小学校から差別をなくすなかまづくりを大事にしようと、ムラの子以外の子どもたちの保護者も含めて、趣旨に賛同して参加した子どもたちが参加している。滋賀の報告で、元気が出る、思いが共有できるなかまにしたいという趣旨がよくわかった。

自分は、部落問題教育をやってきたのかなと思い、子どもたちと一緒に学ばないといけないという指摘で、そうだと気づかされた。

熊本 集会所の学習会や県や全国の高校生集會に参加してきた。その中で、子どもたちが自分のこと

を自覚していくということを気づいた。

関わっていた子が、高校3年の時に「私は、部落解放のことと、みんなに部落民だということを宣言したい」と言ってきた。私は、卒業前だからやめろと言った。その子は、「みんなに申し訳ない。自分はムラの間人と言えないし、それを隠しているような気がする。だから、堂々と発表していききたい」と言った。そのクラスの元気のいい子どもたちは、本音を語るその子を見ながら、涙をしていた。感想には、「こんなきついことを話せるのは、すごい」「私は、もっと強く生きていきたい」と書いていた。

その子は関東に就職して、結婚する時に、相手とその家族を連れてきて、集会所で「ここがムラです。ここで勉強しました」と言った。相手の親は、「そんな理不尽なことは、許せん」と言われた。私は、その時も不安だったが、その子は堂々とやっていく。そして、今もつながっている。こっちは教えつつもりだけど、その子は、「先生、同和教育を続けますか」と言った。「続ける」とは言ったが、ずっと続けるとか考えていなかった。今、同和教育に、人権教育に、こうやって出会ってよかったと思う。

香川(報告者)2日間、参加して本当によかった。差別心があることを伝えることで解放されて、差別をなくす側としてなかまをつくっていくことが、まちがいではなかったということを確認できた。そのなかまをどうやってつくっていったらいいのかという提案をしてくれた方と同じ思いで、地元に戻ってみんなで差別をなくす側の人たちを増やし、なかまとして自分のつらいことも言い合える場をつくっていききたい。